妙竹林話七偏人

しちへんじん

下

梅亭金鵞

興津要＝校注

校注者 興津要　1924年栃木県生れ。早大国文科卒。早大教授。日本近世文学、ことに江戸戯作を専攻。著書、「転換期の文学——江戸から明治へ」「明治開化期文学の研究」「落語——笑いの年輪」「異端のアルチザンたち」「江戸庶民の風俗と人情」「江戸小咄漫歩」ほか多数。

妙竹林話七偏人(下)

興津要校注
© Kaname OKitsu 1983

講談社文庫
定価360円

昭和58年2月15日第1刷発行

発行者——三木章
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国オフセット株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131791-1 (0)

講談社文庫

妙竹林話七偏人

(下)

梅亭金鶴 作・興津 要 校注

講談社

目次

四編叙　二
四編卷之上　一九
四編卷之中　四三
四編卷之下　六七
五編叙　九三
五編卷之上　九九
五編卷之中　一三三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

五編巻之下　一四九

解説　興津要

解題　一六九

最後の戯作者梅亭金鵞の生涯　一七〇

凡例

本書は、できうるかぎり原本を忠実に翻刻したが、一般読者を対象とする文庫本の性質上、読みやすく、わかりやすくするために、つぎの諸点については手をくわえた。

一、清濁音の極端なあやまりは訂正した。

一、漢字では、「萬」「寶」「餘」「聲」などの類は、「万」「宝」「余」「声」などの常用漢字に、また、「夕部」「逃げる」「开(そ)りやア」「俟(ま)つ」「孑孑」などの類は、「夕べ」「逃げる」「そりやア」「待つ」「ぼうふら」などとあらためた。

一、漢字に送り仮名がなくて判読に苦しむものについては、送り仮名を付した。

一、文字づかいのまちがいもところどころにあるが、これは、戯作本の特色でもあるので、あえて訂正しなかった。

一、「東西〻〻」「太〻」などは、「東西東西」「太太」などと、「ヱ、イ」「フム、」「ドレ〳〵」な

どは、「ヱヱイ」「フムム」「ドレドレ」などと、それぞれあらためた。

一、会話には、もともとついている上の「のほかに、」という下のとじカッコもほどこした。

一、原文の会話は、虚ろ「亦思ふのか　喜次「東西　とつづいたかたちだが、各人別行に分けて読みやすくした。

一、「気抜(きぬけ)気の毒、屁のえ
　甲　乙　丙」などは、「気抜け［甲］、気の毒［乙］、屁のえ［丙］」などと書きあらためた。

一、ふり仮名は、読みやすいように現代表音式の仮名づかいをもちい、難読なものに限った。

底本としては、家蔵本および早稲田大学図書館本をもちいた。

妙竹林話

七偏人

(下)

妙竹林話

七偏人

四編上

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

叙

徒然なるままに、日ぐらし硯にむかひて（吉田兼好著『徒然草』巻頭の文章。「することもなく退屈なので一日じゅう硯に向って」の意）、七偏人の四編の序文、ハテ何とした物だやらと、思案に出子を廻らせど、下手の考へ休むの喩へ、竹の林に名を得しは、中華にては七賢人、我が朝にては（日本では）竹取の、翁が娘赫奕姫、彼虚つきの弥次郎（うそつきな者をいう擬人名）は、竹の放屁の音にひびき、竹になりたや七九竹、心の竹は小唄の一ト節、姿は見えぬ竹簾、竹の子笠（竹の皮を編んでつくった笠）に面をかくし、竹鑓さげしは竹智光秀（近松柳ほか作『絵本太功記』に出る武智光秀）、小田の蛙の音にきく、鶯はやき梅亭ぬし（梅亭金鶯）と、名乗りて見れば竹馬の友垣、されども腹の布袋竹に、およばぬ余は青皮の、むけぬ愚才の竹奴、矢竹ごころにはやれども（勇みに勇んで心ははやるが）、弓とはならぬ寒竹の、筠灯台をかかげつつ、木に竹を次ぐ百物語、例の滑稽妙竹林話、竹に八千代の売れ物に、廻らぬ

筆の今年竹（ことしだけ）、灯心でほる根なし言を、竹の柱にもたれつつ、東叡山下（とうえいざんか）の竹窓に述（のぶ）る。

岳亭春信

（通称岡部助左衛門。下谷広小路の名主。戯作、狂歌、画をよくした師岳亭丘山の画名春信を継いだが、画は描かず、戯作を執筆）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com